

教授はコミュニケーションなしには不可能であり、多種多様で、多層的・多面的なコミュニケーション状況とコミュニケーション関係をもつ非常に密度の高い、多様に構成されたコミュニケーション事象として把握されるべきこと、さらにコミュニケーションを中心とする教授内部の諸ファクターの構造化を試みるべきであることを強調した。そして、教授内容は、教授過程においてコミュニケーションを介して過程的に創造されるものとして捉える必要があること、コミュニケーション・メディアとしての教材をメディア教育学の観点から把握しなおすことの重要性を指摘した。

井寄と河村は、大阪教育大学附属平野中学校における生徒による課題追求型の総合的学習JOINの中で取り組まれた「日本・ドイツEメールプロジェクト」の成果について報告した。このプロジェクトは、ライプツィヒのF.A.ブロックハウス・ギムナジウムの第9,10学年の生徒とのメール交換をツールとして各自の課題を追求するプロセスの中に、異文化コミュニケーション、コンピュータ、英語、共同的活動のスキルなど様々な学習の要素を埋め込んで組織されたものである。交流のプロセスは実際には(1)相互の文化について理解する、(2)相互の関心の所在を探る、(3)問題を焦点化し、お互いの考えを交流する、というステップを踏んで行われた。このプロジェクトにおいて、主にマスメディア経由のドイツの画一的なイメージがメールを介したコミュニケーションの中で相対化され、相手の文化についての理解が深まるとともに、マスメディアの持つ特性についての理解も得られるようになった。またこのメール交換から双方が共同して考えることができるテーマについての意見交換も行われた。

報告の後、理論的・実践的ないくつかの問題についての討議を行った。参加者は約15名であった。
(文責：手取義宏)

イスラーム世界の教育研究の可能性

企画者 西野 節男 (名古屋大学)
提案者 服部 美奈 (岐阜聖徳学園大学)
三尾 真琴 (名古屋大学大学院生)
飯塚 正人 (東京外国語大学)

イスラームのプレゼンスが世界的に増大し、わ

が国でもイスラームに関する研究が活発に行われるようになった。教育はイスラームにおいて、歴史的にきわめて重要な位置を占めてきたし、近年では科学技術の急速な発展に直面し「知識のイスラーム化」が叫ばれ、教育改革はイスラーム世界共通に重要課題として取り組まれている。「近代学校」化された教育をイスラーム化するという目論み、それは国家をこえたイスラームの共同体性ともかかわり、20世紀教育学が所与の前提としてきた近代化や国民国家といった理念や枠組みを問い直す方向をも内包する。イスラームにおける教育の重要性認識にひきかえ、わが国の教育学研究ではイスラーム世界への関心が著しく乏しかったが、近年になってようやくイスラーム世界の教育にアプローチする研究者も増えつつある。本ラウンドテーブルではイスラーム教育あるいはイスラーム世界の教育に関心を持つ数少ない研究者が集まり、またイスラーム思想研究、中東地域研究の専門家の参加も得て、それぞれのフィールドにそくしつつ、イスラーム世界の教育研究の可能性について議論を交わした。

服部美奈は「西スマトラの近代女子学校研究から考える」と題して提案を行った。服部は、導入部で、インドネシアの西スマトラで行った自らの長期フィールド調査に基づき、ローカルなコンテクストの中の「近代」「教育」「女性」に関する考察を紹介した。そして、知の伝達形態の変化、西洋的知とイスラーム的知、現実のイスラームとムスリム(イスラーム教徒)の価値形成などを着眼的としてあげ、学校教育研究は社会との連関の中で行われるべきことをあらためて確認した。そこからイスラーム世界の教育研究の可能性として、以下の5点、すなわち(1)イスラーム教育思想(タルビア)の分析と考察 (2)ムスリムの子ども史研究 (3)子どもの通過儀礼と子育ての実践 (4)知の伝達形態の変化 (5)精神的な救済としてのイスラームの役割の5点をあげた。(1)については研究の蓄積のある西洋教育思想研究とは違い、その研究にはアラビア語能力が求められるが、東南アジア研究者としてそれは可能かと問いかけた。

三尾真琴は自らのフィールドのレバノンの事例「宗派主義とイスラーム教育の多様性」をテーマに、政治システムとしての宗派主義、私立学校の「教育の自由」、内戦後におけるイスラーム、特にシーア派のプレゼンスの増大について概要を紹介し

た。そしてイスラームに対する一般的な捉え方として一面的で否定的な評価に結びつきがちであることを指摘したうえで、中東学会や国際政治学会における教育への関心の低さ、他方、教育学関係の学会における欧米中心主義とイスラームに関する無関心を問題として取り上げた。イスラーム(教育)の本質と多様性を解明するためには、西洋中心主義を乗り越え、イスラーム世界の地域間相違に対する視点の必要性を指摘する。レバノンにおいてもフィールド調査によって、スンナ派とシーア派の学校教育・学校文化の違いが明らかになることを提示し、一般化や理論化とは距離を置いてローカルな研究の可能性を示唆した。

飯塚正人は「イスラーム思想研究の立場から」提案を行った。イスラーム思想において「教育」には ta'lim (知識の伝授) と tarbiya (イスラーム倫理思想に基づく道徳教育) があること、「知識のイスラーム化」にも近年の「イスラーム復興」の一環としての文化ナショナリズムの試みと、19世紀末以来の西洋近代科学とイスラーム諸学を統合する試みの二つの側面があることを指摘する。いずれにせよ、道徳的頹廢への危機感が背後にあり、イスラーム倫理の有効性に疑念が生じないように、イスラームと近代科学を両立させようとしている点を指摘する。イスラーム世界の教育研究の可能性として、倫理・道徳教育のあり方、イスラーム教育思想における西洋思想の受容、近代国家における宗教教育と道徳教育の比較研究、「民族教育」「祖国教育」の功罪の四つを提示した。

イスラーム世界の教育の現実を捉えるのに、教育学の側ではイスラーム教育思想・教育実践の研究が必要だとし、他方で西洋教育思想・教育理論に通じた研究者こそイスラーム世界の教育研究を進めようという対照的な視点が出され興味深かった。また、イスラーム世界には先進諸国が抱えるような教育問題—いじめ、引きこもり、自殺など—がないという言明をめぐる議論も行われた。日本における国際化のイメージからイスラームは抜け落ちているが、現実には教育の国際化もイスラーム世界を抜きにしては語れず、実践的な意味からもイスラーム教育研究を活発化する必要がある。こうしたラウンドテーブルの継続的開催の要望も出された。

*当初は鈴木康郎(筑波大学)も「タイ南部のムスリム・マイノリティの事例から」提案を行う予

定であったが、都合により取り消しとなった。
参加者 15 名。(文責：西野節男)

高校通学区域と学校選択

企画者 葉養 正明(東京学芸大学)
三上 和夫(神戸大学)
本図 愛実(宮城教育大学)
貞広 斎子(日本学術振興会特別研究員)
提案者 三上 和夫(神戸大学)
榊原 禎宏(山梨大学)
山岸 利次(東京大学大学院)

1. 企画趣旨

これまでの通学区域の弾力的運用に関するラウンドテーブルの趣旨の延長上に、本年度は、通学区域と学校選択の問題を、高等学校に限定して検討するということが企画された。これは、一方で、東京都をはじめとして、高校段階においても通学区域を(廃止も含めて)弾力的に運用することが政策日程にあがっていること、他方で、高校入学段階における学校選択という経験が蓄積された現段階において、学校選択と通学区域の問題が歴史的・原理的に問い直すべき問題として浮上したことによる。

2. 提案

まず、三上会員より、ラウンドテーブルの趣旨の説明も含め、高校通学区域と学校選択の問題に対し、理論的にいかにアプローチするか、という観点からの報告がなされた。三上会員は、耐久消費財から対人サービスへと消費財の中心が移行した現代社会においては、教育制度は公私混合形態の一つであるにとらえられ、それゆえ、教育においては選択を少なくすべきであるという規範をとりはらった上で、教育制度における「是認される擬似市場の設計」という視点から学校選択と通学区域の問題を考察しなければならないとした。論点は多岐にわたるが、総じて、それは行政次元から区別された、独自の展開をなす社会的次元を教育(制度)理論において位置付けるということに他ならないといえる。とりわけ、学校選択、また、それが行われる場としての通学区域は、ガバナンスとそれに対する社会的支持・社会評価の問題として検討される必要があるとした。

次に、榊原会員より、山梨県における高校入試